

二〇〇四年一月七日

神のかたちと人格的關係性

創世記一章二六節～三一節

今日もこれまでお話ししてきました、人が神のかたちに造られていることの意味についてのお話を続けます。今日取り上げるのは、創世記一章二六節、二七節に、

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と記されていることを受けて、神のかたちは人が男性と女性に造られたことにあるという見方です。これはカール・バルトの見方ということでも知られています。神のかたちは男性と女性の区別と関係にあるということです。

このことをさらに広げていきますと、神のかたちは人と人との間の区別と関係、つまり「我と汝」の關係にあるということになります。それで、神さまと人との類似は存在の類比ではなく、關係の類比であるとされます。

存在の類比というのは、「存在という概念」が絶対的な存在である神さまから始まって感覺的な存在に至るまでの段階的な存在に対して類比的に適用されるという理解の仕方です。これを神さまと人の關係について言いますと、神さまと人間の間に、存在における区別とともに類似性があるということになります。神さまと人はともに「存在している」あるいは「存在である」のですが、二つの存在は類比的であるということです。このことから、人は神さまを存在の類比によって認識するという考え方が生まれてきます。神さまの存在のことを、自分たち人間やそのほかの存在との類比によって理解するということです。

なるほどという感じがしますが、これですと、たとえ神さまは完全な存在であり、人は限界のある存在であるということであって、神さまの存在と人間の存在がどこかで連続しているようなことになってしまいます。つまり、神さまと人間が存在論的につながってしまい、創造者と被造物の絶対的な区別、

すなわち神さまの聖さが見失われてしまう危険があります。あるいはこれが、神さまと人に共通する「存在という概念」があるという形でとらえられますと、神さまを規定する概念、この場合は「存在という概念」ですが、そのようなものがあつてということになつてしまします。そうしますと、いかなる存在であつても概念であつても、神さまを越えるものはない、ということが否定されてしまふことになります。

存在の類比は哲学的な存在論の理解の枠内で最高存在に「神」を位置づけ、その枠の中で人間やその他の存在も位置づけるということによつて成り立っています。それで、初めからその哲学的な存在論の発想によつて制約されてしまつていきます。そのために、「神」と人間が存在論的にどこかでつながつてしまつて、造り主である神さまと被造物との間の絶対的な区別があいまいなことになつてしまふ危険性が生まれてきてしまふのです。これは、自然を基礎に据えて恩恵をその上に置くという形の、自然と恩恵の二重構造という実在の理解をするローマ教会の立場で成り立つものです。

しかし、そのように神学的に自覚されていなくても、実質的にこれと同じように理解している人々は、私たちの間にも見られます。たとえば、この世界には、神さまもいらつしゃれば、自然や人間や生き物たちもある、というような感じ方をしてしまうことはいけません。あるいは、神さまは世界の最高存在であり、その下に神さまより小さな存在がたくさんある、というような感じ方をしてしまうことはいけません。そうしますと、神さまと人間が同じ世界にあるものとしてつながつてしまします。また、神さまと自然や人間や生き物たちを含んでいる世界の方が神さまより大きいということになつてしまします。このような問題に気がつかないままに、漫然と、神さまについてこのようなイメージをもつてしまうことがあり得ます。

いずれにしても、神さまと人との関係を、存在論的にどこかでつながつているという形でとらえることは、神さまと人間との間にある絶対的な区別、すなわち神さまの聖さを危うくしてしまします。そこからさらに、罪あるこの世界においては、人間の神格化、被造物の神格化が生み出される危険性があるわけです。それで、神さまと人との関係の基礎になつている神のかたちを存在の類比に沿つて理解しないで、関係の類比で理解すべきであるという主張がこの見方の背景にあります。「実はこれには、人が神さまを知るのには「信仰の類比」によらなければならない」という主張がかかっているのですが、話がやや

こしくなりますので、その点は省略します。」

*

関係の類比というのは、神さまも人間も「我と汝」という人格的な関係のうち存在しているということにおいて類似しているということですが、

創世記一章二六節には、

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。

そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。

と記されています。ここで神さまが「われわれ」と言っておられることに、神さまが「我と汝」という人格的な関係のうちにおられることを見て取ることができます。すでにお話ししましたように、ここで神さまが「われわれ」と言っておられるときの「われわれ」は、神さまの人格の複数性を示していると考えられます。その意味で、ここで神さまが、

われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。

と言っておられることには人格的な関係における交わりがあることが認められます。

そして、二七節には、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と記されています。ここで男性と女性に創造されたと言われている人の間にも「我と汝」の人格的な関係があることを見て取ることができます。これらのことから、神さまと人との間に関係の類比が成り立つと考えられます。そして、人が神のかたちに造られたというときの神のかたちは、人が男性と女性に造られたことにあると考えられます。

*

今お話ししたことから、この見方はとても大切なことを示していることが感じ取れます。けれども、ここで問題としている「神のかたちとはどのようなものか」ということに限ってみますと、この、神のかたちは人が男性と女性に造られたことにあるという見方は成り立たないと思います。

まず、二七節で、

男と女とに彼らを創造された。

と書かれているときの「男」ということば（ザール）と「女」ということば（ネケーバー）は、ともに生物学的なことばで、英語の male と female に当たりません。もし、ここで男性と女性の間「我と汝」という人格的な関係があるということを示そうとしていたのであれば、このような生物学的なことばではなく、「ふさわしい助け手」としての女性の創造を記している二章二三節（二五節に用いられている「男」（イーシュ）と「女」（イツシャー）ということばを用いていたことでしょう。

また、二七節に記されていることをそれぞれの部分に分けてみますと、第一に、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。

第二に、

神のかたちに彼を創造し、

第三に、

男と女とに彼らを創造された。

というように三つの部分に分けられます。

新改訳では、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。

が独立していて、

神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

というように最後の二つがつながっているようになっていきます。しかし、ヘブル語本文の区切りでは、最初の二つがつながっていて、その後文の中の大きな区分を示す記号があります。ですから、最後の、

男と女とに彼らを創造された。

がその前の二つとは区別されるわけです。

神のかたちは人が男性と女性に造られたことにあるという見方では、

男と女とに彼らを創造された。

と言われているのは、

すなわち、男と女とに彼らを創造された。

というように、それに先だつて人が神のかたちに造られたと言われていること
の「定義」を述べているということになります。けれども、この、

男と女とに彼らを創造された。

ということばは、必ずしも、このように理解しなければならぬわけではありません。むしろ、これは、男性も女性も神のかたちに造られているということを示すために加えられたことばであると考えた方がよいと思われます。それで、次に、この点について、いくつかのことをお話ししたいと思います。

*

すでに繰り返しお話ししましたが、創造の御業の記事にはそれを構成しているいくつかの要素があります。その中心は神さまの「創造のみことば」です。それはこの場合には、二六節に記されている、

われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。

という神さまのことばです。そして、二七節に、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と記されているのは、それに対する補足的な説明文です。また、この補足的な説明文は二七節で終わっているのではなく、二八節～三〇節に、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」ついで神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地のの上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与えた。それがあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」すると、そのようになった。と記されていることにまでつながっています。

このことを視野において見ますと、二六節に記されている、われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。

という神さまの創造のみことばにおいては男性と女性のごことは触れられていません。男性と女性のごことは、補足的な説明文である二七節において述べられています。

そして、この二七節に記されている、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

ということばは、二六節に記されている、神さまが言われた、われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。

ということばを受けて、それを説明しているのですが、それとともに、二八節に記されている、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

ということへの導入ともなっていると考えられます。というのは、二八節に記されている神さまの祝福のことばの冒頭の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。

ということばは、人が男性と女性に造られたことを前提としているからです。その意味で、この神さまの祝福のことばは、二七節に記されている、

男と女とに彼らを創造された。

ということばにつながっています。しかも、先ほどお話ししましたように、この二七節で用いられている「男と女」という言葉は生物学的なことばですから、よりいっそう、二八節に記されている神さまの祝福のことばの冒頭の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。

ということへのつながりが感じられます。

*

これと同じように人が神のかたちに造られたことを記している創世記五章一節、二節を見てみましょう。そこには、

これは、アダムの歴史の記録である。神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、男と女とに彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。

と記されています。冒頭の、

これは、アダムの歴史の記録である。

ということばは、五章一節〜六章八節に記されている記事の「見出し」に当たります。それに続く部分において、一節は、

神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、

で終わっています。ですから、これは、

神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られた。

というように、独立しているわけです。そして、これに続く、

男と女とに彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。

ということは、二節に記されています。

このように、五章一節、一節においては、人が神のかたちに造られたことと、男性と女性とに造られたことはより明確に区切られています。そして、人が男性と女性に造られたことは、その後になされた祝福と結び合わされています。

二節に「神は彼らを祝福して」と記されていることは、一章二八節に、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生

き物を支配せよ。」

と記されていることに当たると考えられます。

このことは、すでにお話ししました、一章二七節で、

男と女とに彼らを創造された。

と言われていることが、二八節に記されている

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生

き物を支配せよ。」

ということを導入する役割も果たしているということを支持します。

*

これらのことから、二七節の最後に記されている、

男と女とに彼らを創造された。

ということは、二八節に記されている、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。

という神さまの祝福のことばにつながっているということが分かります。

そうであれば、五章一節、二節に記されているのと同じように、二七節の最後に記されている、

男と女とに彼らを創造された。

ということは、二八節の方にもってきて、二八節を、

そして神は、彼らを男と女に創造された。そして神は彼らを祝福し、この

ように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。……」

というようにした方がよかったですような気がします。

そればかりでなく、文章としまして、このようにした方がすっきりすると

思われる点があります。

一つには、そのようにしますと、二八節は「彼ら」という複数形でまとまりますし、二七節は、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造された。

というように、「人」と「彼」という単数形でまとまります。

もう一つは、新改訳でもなんとか分かりますが、二七節のこの部分は、

神は人を創造された(a)、ご自身のかたちに(b)。

神のかたちに(b)、彼は彼を創造された(a)。

というように、交差対句法(キアスムス)によって表わされていて、ひとまとまりをなしています。

ですから、二七節を、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造された。

で終らせて、

男と女とに彼らを創造された。

ということを一八節の方にもってきて、二八節を、

そして神は、彼らを男と女に創造された。そして神は彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。……」

というようにした方が文章としてもすつきりします。

けれども実際にはそうなっていないくて、

男と女とに彼らを創造された。

ということは二七節に置かれています。

これらのことを考え合わせますと、この、

男と女とに彼らを創造された。

ということが二七節に置かれて、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造された。

ということの後に記されていることは意図的になされたこと、あえてそのようにされたことであるという感じがします。

そうしますと、なぜそのようにしたのかということが問題となります。それは、やはり、

男と女とに彼らを創造された。

ということを、二七節に記されている、人が神のかたちに創造されたことと結びつけることによって、男性も女性も神のかたちに創造されているということがより明確に示されることになるからであると考えられます。

繰り返しになりますが、もし、

男と女とに彼らを創造された。

ということを含めて、

そして神は、彼らを男と女に創造された。そして神は彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。……」

としますと、二七節の方は、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造された。

ということになります。この方が数がそろいますし、主題的にも統一感が出てきます。けれども、そうしますと、神のかたちに造られたのは「人」（ハーアードーム）すなわち男性だけで、女性は子どもを産むために造られたというような考え方が生まれてくる可能性もあります。実際、それは、罪によって墮落した人類の歴史の中で、根深く残ってきた考え方です。そのような誤解を避けるためにも、ここではあえて、

男と女とに彼らを創造された。

ということを、二七節に記されている、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造された。

ということの後に記しているのだと考えられます。

このように、二七節において、

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と言われている中の、

男と女とに彼らを創造された。

ということばは、その前に記されている「人」が神のかたちに造られているということの「定義」を記しているのではなく、男性も女性も等しく神のかたちに創造されていることを示していると考えられます。

それで、創世記一章二六節、二七節に記されていることから、神のかたちは

人が男性と女性に造られていることにありという結論を導き出すことはできないと言わなければなりません。

*

これと関連して、さらに、注目すべきことがあります。それは、聖書の全体をとおして言えることですが、神のかたちのことが記されているときに、神のかたちが男性と女性の関係を意味しているという形で取り上げられている個所がないということです。聖書において、男性と女性の関係が神さまに関わることとして取り上げられているときには、一貫して、主とその契約の民の関係、キリストとそのからだである教会の関係を表すために用いられています。そして、三位一体の神さまの位格の間の関係を表すために、この男性と女性の関係が用いられることはありません。言うまでもなく、三位一体の神さまの位格の間の関係を表すためには、父と子の関係が用いられています。

このことも、神のかたちは男性と女性の関係にあるのではないという方向を示しています。

このように、神のかたちは、男性と女性の関係、さらにより広く、「我と汝」の関係といった関係性にあると理解すべきではなく、男性であれ女性であれ、一人一人の人間が、それぞれ神のかたちに造られていると考えるべきです。

このことは、これまでお話ししてきました、肉体と霊魂が結び合って成り立っている人格としての個々の人間が神のかたちに造られており、一人一人の人間が神のかたちである、という考え方を支持するものです。